

三尺角

泉鏡花

青空文庫

「……………」

山には木樵^{きこりうた}唄、水には船唄^{ふなうた}、駅路^{うまやじ}には馬子^{まご}の唄、渠等^{かれら}はこれ^{もつ}を以て心を慰め^{なぐさ}、労^{ろう}を休め、我が身^{おの}を忘れて屈託^{くつたく}なくその業^{ぎよう}に服するので、恰^{あたか}も時計が動く毎^{ごと}にセコンドが鳴るようなものであろう。またそれがために勢^{いきおい}を増し、力を得^うることは、戦^{たたかい}に鯨波^きを挙げるに齊^{ひと}しい、曳々^{えいえい}！ と一齊に声を合わせるトタンに、故郷^{ふるさと}も、妻子^{つまこ}も、死も、時間も、慾も、未練も忘れるのである。同じ道理で、坂は照る照る鈴鹿^{すずか}は曇る^{くも}Ⅱといい、拾遺^{あわや}りたや足^た

袋添えてⅡと唱える場合には、いづれも疲を休めるのである、無益なもののおもいを消すのである、寧ろ苦勞を紛らそうとするのである、憂を散じよう、恋を忘れよう、泣音を忍ぼうとするのである。

それだから追分が何時でもあわれに感じらるる。つまるところ卑怯な、臆病な老人が念仏を唱えるのと大差はないので、語を換えて言えば、不残、節をつけた不平の独言である。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、この木挽は唄を謡わなかった。その木挽の与吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで礼拝する如く、上から挽きおろし、挽き

おろす。この度のたびは、一昨日おとといの朝から懸かつた仕事で、ハヤその半なかばを挽たいた。丈四間半たけけんはん、小口三尺まわり四角な樟くすのきを真ま一二つに割わろうとするので、与吉は十七の小腕こうでだけれども、この業わざには長たけて居ゐた。

めはなだち
目鼻立めはなだちの愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈ごぶがりに向む顔こう巻ちまき、さんじやくおび
三尺帯さんしやくおびを前で結むすんで、南なんの字を大く染抜おおそめぬいた半被はつぴを着て居る、

これは此処ここの大家たいけの仕着しきせで、挽ひいてる樟ももその持分もちぶん。

未だ暑まいから股引ももひきは穿はかず、跣足はだしで木屑きくずの中なについた膝ひざ、股もも、

胸むねのあたりは色が白はい。大柄おほだけれども肥ふつては居ゐらぬ、ならば袴はかまでも穿はかして見みたい。与吉きちが身体からだを入れようという家は、直間すぐま近ちかで、一町ちやうばかり行ゆくと、袂たもとに一本暴風雨あらしで根返ねがえして横様よこぎまにな

つたまま、半ば枯れて、半ば青々とした、あわれな銀杏いちようの矮わいじ樹ゆがある、橋が一個ひとつ。その渋色の橋を渡ると、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦とまの中へ出入でいりをするので、この船が与吉すまいの住居かんちよう。で干潮かんちようの時は見るも哀あわれで、宛然さながら洪水みづのあとの如く、何時いつ棄すてた世帯道具しやたいどうぐやら、欠搥鉢かけすりばちが黒く沈んで、蓬おどろのような水草は波の随意まにまに靡なびいて居る。この水草はまた年久しく、船の底ふなばたに搦つかみ附ついて、恰いとおも巖いわに苔蒸こけむしたかのよう、与吉の家をしつかりと結ゆわえて放しそうにもしないが、大川おおかわから汐しおがさして来れば、岸に茂った柳の枝が水に潜くぐり、泥だらけな笹の葉がぴたぴたと洗われて、底が見えなくなり、水草の隠れるに従したがうて、船が浮上うきあがると、堤防おちかたの遠方おちかたにすすくと立つて白い煙を吐く此こ

処こかしこ彼ふか処えんとつの富家の煙突が低くなつて、水底のその欠搗鉢、塵ちりあく
 芥た、檻ぼろぎれ樓切、釘おれの折などは不のこらず残形を消して、蒼あおい潮を満まん々
 と湛たたえた溜ためいけ池さぎなみの小波の上なる家は、掃除をするでもなしに美
 しい。

爾そのとき時は船から陸へ渡した板が真直まつすぐになる。これを渡つて、
 今朝は殆ど満潮だったから、与吉は柳の中で※と旭ぼつ あさひがさす、黄金こがね
 のような光線に、その罪のない顔を照らされて仕事に出た。

二

それから日ひいちにち一日おなじことをして働いて、黄昏たそがれかかると日

が春^{うすづ}き、柳の葉が力なく低^たれて水が暗^{くろ}うなると汐^{しお}が退^ひく、船が沈^{しず}んで、板が斜めになるのを渡つて家に帰るので。

留守には、年寄つた腰の立たない与吉の爺^{ちゃん}々が一人で寝て居るが、老後の病^{やまい}で次第に弱るのであるから、急に容体の変るという憂^{きづかい}慮^こはないけれども、与吉は雇^{やと}われ先で昼飯をまかなわれては、小休^{こやすみ}の間に毎日一度ずつ、見舞に帰るのが例であつた。

「じやあ行つて来るぜ、父^{ちゃん}爺^ん。」

与平^{よへい}という親^{おやじ}仁^ねは、涅槃^{ねはん}に入つたような形で、胴^{どう}の間に寝^まながら、仏^{ほとけ}造^{つく}つた額^{ひたい}を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子^{せがれ}が地蔵^{じぞう}眉^{まゆ}の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉^{うなず}しそうに頷^{うなず}いて、

「晩にや又柳屋の豆腐またやなぎやとうふにしてくんねえよ。」

「あい、」といって苦くるを潜くぐつて這はうようにして船から出た、与吉はズツと立って板を渡つた。向むこうて筋違すじっかい、角かどから二軒目に小さな柳の樹が一本、その低い枝のしなやかに垂れた葉隠はかくれに、一間けんぐち口二枚の腰障子こししょうじがあつて、一枚には仮名かな、一枚には真名まなで豆腐と書いてある。柳の葉の翠みどりを透すかして、障子の紙は新らしく白いが、秋が近いから、破れて煤すすけたのを貼替はりかえたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗しにせだけれども、手広く商あきないをするのではなく、八九十軒もあろう百軒足らずのこの部落だけを花と主くにして、今代こんだいは喜蔵きざうという若い亭主が、自分で売りに廻まわるばかりであるから、商に出た留守の、昼過ひるすぎは森しんとして、柳の蔭かげに

腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸^かけて、地の^じ窪^{くぼ}んだ、泥^ぬ濘^{かるみ}を埋めるため、一面に貝^{かい}殻^{がら}が敷いてある、白いの、半分黒いの、薄^{うす}紅^{べに}、赤いのも交つて堆^{うずたか}い。

隣^{となり}屋^やはこの辺^{へん}に棟^{むね}を並ぶる木屋の大家で、軒^{のき}、廂^{ひさし}、屋根の上ま

で、犇^{ひし}と木材を積^{つみ}揃^{そろ}えた、真^ま中^{んなか}を分けて、空^{そら}高^{ただか}い長方形の

透^{すき}間^ま

およ

から凡^{およ}そ三十畳も敷けようという店の片端が見える、その木

材の蔭になつて、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷^{ひやひ}

々^やとした店^{みせ}前^{さき}に、帳^{ちやうば}場^{ばう}格^{ごう}子^しを控えて、年配の番頭が唯^{ただ}一人

帳^{ちやうばい}

合^{あひ}をしている。これが角屋敷で、折^{おれ}曲^{まが}ると灰色をした

道^{みち}が一^{ひと}筋^{すじ}、電柱の著^{いち}しく傾^{ちじる}いたのが、前^{まえ}と後^{うしろ}へ、別^{わか}々に頭^{かしら}を掉^ふ

つて奥^{おく}深^{ふこ}う立^たつて居る、鋼^{はり}線^{がね}が又^{また}半^{なか}だるみをして、廂^{ひさし}よりも

低い処ところを、弱々よわよわと、斜しやめに、さもさも衰おとろえた形かたちで、永代えいたいの方

から長く続いて居るが、図ずに描かいて線を引くと、文明の程度が段々こつち此方こつちへ来るに従したがうて、屋根越やねごしに鈍にぶることが分るであろう。

単に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋たもとの袂いちようの銀杏ぎんぎようの

樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の塀へらも、それ等らに限らず、

あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、皆傾みないて居る、傾い

て居る、傾いて居るがことごと尽いちようく一様むきな向にではなく、或あるものは南の

方へ、或ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てんでんば

らばらになつて、この風のない、天そらの晴れた、曇くもりのない、水面の

そよそよとした、静かな、穏おだやかな日中ひなかに処しよして、猶且なおかつ暴風に揉も

まれ、揺ゆらるる、その瞬間おもむきの趣あり。ものの色もすべて褪あせて、

その灰色に鼠ねずみをさした湿地も、草も、樹も、一部落を蔽おおい包つつんだ夥多おびただしい材木も、材木の中を見え透く溜池ためいけの水の色も、一い切っさい、喪服もふくを着けたようつつで、果敢はかなく哀あわれである。

三

界隈かいわいの景色がそんなに沈鬱ちんうつで、湿々じめじめとして居るに從したがうて、住む者もまた高たか声こえではものをいわない。歩行あるくにも内端うちわで、俯向うつむき勝がちで、豆腐屋も、八百屋やおやも黙もくつて通る。風俗も派手でない、女このみの好も濃厚ではない、髪かざりの飾も赤いものは少なく、皆心するともなく、風土の喪に服して居るのであろう。

元来岸の柳の根は、家々の根太ねだよりも高いのであるから、破風はふの上で、切々きれぎれに、蛙かわずが鳴くのも、欄干らんかんの壊れた、板のはなればなれな、杭くいの抜けた三角形の橋の上に蘆あしが茂って、虫がすだくのも、船ふなむし虫が群むらがって往来を駆けまわるのも、工場の煙突えんとつの煙けむりが遙かに見えるのも、洲崎すさきへ通う車の音がかたまつて響くのも、二日おき三日置きに思出おもいだしたように巡查じゆんさが入るのも、けたたましく郵便脚夫きやくふが走込はしりこむのも、鳥からすが鳴くのも、皆何となく土地の末路を示す、滅亡の兆ちようであるらしい。

けれども、滅びるといつて、敢てこの部落が無くなるという意味ではない、衰えるという意味ではない、人と家とは栄さかえるので、進歩するので、繁昌はんじようするので、やがてその電柱は真直まつすぐにな

り、鋼線^{はりがね}は張^{はり}を持ち、橋がペンキ塗^{ぬり}になつて、黒塀^{れんが}が煉瓦^{かわ}に換^{かわ}ると、蛙^{かわず}、船虫、そんなものは、不^{のこらず}残^{いしばい}石灰^{すなわ}で殺されよう。即^{すなわ}ち人と家とは、栄えるので、恁^{かか}る景色^{おもかげ}の倂^{おもかげ}がなくなろうとする、その末路を示して、滅亡の兆を表わすので、詮^{せん}ずるに、蛇^{へび}は進^{すす}んで衣^{ころも}を脱ぎ、蟬^{せみ}は榮えて殻^{から}を棄^すてる、人と家とが、皆^た他の光榮あり、便利あり、利益ある方面に向つて脱出^{ぬけだ}した跡には、この地のかかる倂^{うつつせみ}が、空^{うつつせみ}蟬になり脱^{ぬけがら}殻^しになつて了^{しま}うのである。敢て未来のことはいわず、現在^{すで}既にその姿になつて居るのではないか、脱け出した或^{あるもの}者は、鳴き、且^かつ飛^とび、或^{あるもの}者は、走り、且^くつ食^{くら}う、けれども衣^{きぬ}を脱いで出た蛇は、残した殻より、必ずしも美しいものとはいわれない。

ああ、まぼろしのなつかしい、空蟬のような風土は、却^{かえ}つて
うつくしいものを産するのか、柳屋に艶^{あでやか}麗な姿が見える。

与吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、岸^{あが}に上ると、
思うともなしに豆腐屋に目を注いだ。

柳屋は浅間^{あさま}な住居^{すまい}、上^{あがり}框^{がまち}を背後^{うしろ}にして、見通^{みとお}の四畳半の
片端^{かたはし}に、隣家^{となり}で帳^{ちようあい}合^あをする番頭^{おなじ}と同一あたりの、柱^{もた}に凭^{もた}れ、

袖をば胸のあたりで引き合わせて、浴衣^{ゆかた}の袂^{たもと}を折返^{おりかえ}して、寢床^{ねどこ}
の上に坐^{すわ}つた膝^{ひざ}に搔^{かい}巻^{まき}を懸^かけて居る。背^{うしろ}には綿^{わた}の厚い、ふつく

りした、豎^{たて}縞^{しま}のちやんちやんを着^きた、鬱金^{うこん}木綿^{もめん}の裏が見えて襟^え

脚^{あし}が雪^{ゆき}のよう、艶^{つや}氣^けのない、赤熊^{しゃぐま}のような、ばさばさした、

余るほどあるのを天神^{てんじん}に結^ゆつて、浅黄^{あさぎ}の角^{つの}絞^{しぼり}の手絡^{てがら}を弛^{ゆる}う

大きくかけたが、病氣であろう、弱々とした後姿。
よわよわ うしろすがた

見透みとおしの裏は小庭こにわもなく、すぐ隣屋となりの物置ものおきで、此処ここにも犇ひしひ

々と材木が建重たてかさねてあるから、薄暗い中に、鮮麗あざやかなその浅

黄ゆぐさの手絡と片頬かたほの白いのが、拭込ふきこんだ柱に映つて、ト見ると露

草が咲いたようで、果敢はかなくも綺麗きれいである。

与吉はよくも見ず、通りがかりに、

「今日は、」と、声を掛けたが、フト引戻ひきもとさるるようにして

覗のぞいて見た、心着こころづくと、自分が挨拶あいさつしたつもりの婦人おんなはこの

人ではない。

四

「居ない。」と呟くが如くにいつて、そのまま通抜けようとする。

ト日があたつて暖たかそうな、明い腰障子の内に、前刻から静かに水を搔廻す氣勢がして居たが、ばったりといつて、下駄の音。

「与吉さん、仕事にかい。」

と婀娜たる声、障子を開けて顔を出した、水色の唐縮緬を引裂いたままの襷、玉のような腕もあらわに、蜘蛛の囀を絞った浴衣、帯は占めず、細紐の態で裾を端折つて、布の純白なのを、短かく脛に掛けて甲斐甲斐しい。

齒を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉は落さぬ、束ね髪たばがみの中年増ちゆうどしま、喜蔵の女房で、お品しなという。濡れた手ぬを間近な柳の幹にかけて半身はんしんを出した、お品は与吉を見て微笑ほほえんだ。

土間どまは一面の日あたりで、盤台はんだい、桶おけ、布巾ふきんなど、ありつたけのもの皆濡れたのに、薄く陽炎かげろうのようなのが立籠たちこめて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木あらきの大桶の水の色は、薄ら蒼うすあおく、柳の影が映って居る。

「晩方ばんが又来るんだ。」

お品は莞爾にっこりしながら、

「難有ありがとう存じます、」故わざと慇懃いんぎんにいった。

つかつかと行懸ゆきかけた与吉は、これを聞くと、あまり自分の素気そつけなかつたのに気がついたか、小戾こもどりして真顔まがおで、眼を一ツ瞬しばいたて、「ええ、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きようである。

「ほほほ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様まえさんはお客様じゃあないかね、お客様なら私わたしん処ところの旦那だんなだね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」と柳に手すがを縫ぬつて半身を伸出のびたまま、胸と顔を斜めにして、与吉の顔さしを差さ覗ぞく。

与吉は極きまりの悪おもむきそうな趣きで、

「お客様だつて、あの、私は木挽こびきの小僧だもの。」

と手真似てまねで見せた、与吉は両手つきだを突出してぐつと引いた。

「こうやって、こう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様まえさん

はおかみさんだろう、柳屋のおかみさんじゃねえか、それ見ねえ、
此方こつちでお辞儀じぎをしなけりやならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目みを睜みはつて、

「まあ、勿体もったいないわねえ、私達に何のお前さん……」といいか

けて、つくづく瞻みまもりながら、お品はずつと立つて、与吉に向い合

い、その襷たすき懸がけの綺麗きれいな腕うでを、両方大袈裟おおげさに振って見せた。

「こうやって威張いばつてお在いよ。」

「威張らなくツたつて、何も、威張らなくツたつて構わないから、

父爺ちやんが魚を食つてくれると可いいけれど、「と何と思つたか与吉はうつむいて悄しおれたのである。

「何どうしたんだね、又余計に悪くなつたの。」と親切にも優しく眉ひそを顰ひそめて聞いた。

「余計に悪くなつて堪たまるもんか、この節せつあ心こころ持もちが快いい方ほうだつていうけれど、え、魚さかな氣なまぐさを食わねえじゃあ、身体からだが弱るつていうのに、父爺はね、腥なまぐさいものにや箸はしもつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえツていうんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出来まいか。」と思おも出いだしたように唐突だしぬけにいった。

五

「おや、」

お品は与吉がいうことの余り突拍子とつぴょうしなのを、笑うよりも先まず驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出来そうなものなんだなあ。雁がんもどきもどきツて、ほら、種々いろんなものが入った油揚あぶらあげがあらあ、銀ぎん杏あんだの、椎茸しいたけだの、あれだ、あの中へ、え、肴さかなを入れて交まぜツこにするてえことあ不可いけねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いいやね、聞いて見て置きましたようよ。」

「ああ、聞いて見てくんねえ、真個ほんとに肴さかなツ気が無くツちやあ、台

なしからだ身体が弱るツていうんだもの。」

「何故なぜ父おとつさん上なまぐさは腥あがをお食りじやあないのだね。」

与吉の真面目まじめなのに釣込つりこまれて、笑うことの出来なかつたお品とうとうは、到頭骨のある豆腐の注文を笑わずに聞き済ました、そして真顔まがおで尋ねた。

「ええ、その何だつて、物をこそ言わねえけれど、目もあれば、口もある、それで生なまじろ白あおい色をして、蒼いものもあるがね、煮られて皿の中に横になつた姿てえものは、魚さかな々さかなと一口ひとくちにやあいうけれど、考えて見りやあ生身なまみをぐつぐつ煮着けたのだ、尾おかし頭のあるものの死骸しがいだと思うと、気味が悪くツて食べられねえツて、左様そういうんだ。

詰^{つま}らねえことを父爺^{ちやん}いうもんじゃあねえ、山^{やま}中の爺婆^{じいばば}でも塩^{しほ}したのを食べるツてよ。

煮^にたのが、心^{こころ}持^{もち}が悪^{わる}けりや、刺身^{さしみ}にして食^くべないかつていうとね、身震^{みぶるい}をするんだぜ。刺身^{さしみ}ツていやあ一寸^{いっすんだめし}試^なだ、鰯^{なます}にすりやぶつぶつ切^{ぎり}か、あの又^{また}目口^{めぐち}のついた天窓^{あたま}へ骨^{つな}が繋^つつて肉^{にく}が絡^{まと}いついて残^{のこ}る凶^{あや}なんてものは、と厭^{いや}な顔^{かほ}をするからね。ああ、「[、]」といつて与吉^{うきち}は頷^{うなず}いた。これは力^{ちから}を入れて対^{あいて}手にその意^いを得^えさせようとしたのである。

「左様^{そう}なんかねえ、年^{とし}紀^{せい}の故^ゆもあろう、一ツは氣分^{きぶん}だね、お前^{まへ}さん、そんなに厭^{いや}がるものを無理^{むり}に食^くべさせない方が可^いいよ、心持^{こころもち}を悪^{わる}くすりや身体^{からだ}のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも痩^やせるようだから心配だもの。気が着かないようにして食べさせりや、胸を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐の何よ。ソレ、」

「骨のあるがんもどきかい、ほほほほほ、」と笑った、垢^{あかぬ}抜けのした顔に鉄漿^{かね}を含んで美しい。

片^{かた}頬^ほに触れた柳の葉先を、お品はその艶^{つや}やかに黒い前歯^{くわ}で銜^{くわ}て、扱^こくようにして引断^{ひっき}った。青い葉を、カチカチと二ツばかり噛^かんで手に取^もつて、掌^{てのひら}に載せて見た。トタンに框^{かまち}の取^と着^つの柱^きに凭^{もた}れた浅黄^{あさぎ}の手絡^{てがら}が此方^{こつち}を見向^むく、うら少^{わかい}のと面^{おもて}を合わせた。

その時までには、殆^{ほとん}ど自分で何をするかに心^{こころ}着^ちいて居^ゐないよう、無意識の間にして居^ゐたらしいが、フト目を留^{とど}めて、俯^{うつむ}向^むいて、じ

つと見て、又梢こずえを仰いで、

「与吉さんのいうようじゃあ、まあ、嘸さぞこの葉も痛むこツたろうねえ。」

と微笑ほほえんで見せて、少わいのがその清すずしい目に留めると、くるりと廻まわつて、空そらぎまに手を上げた、お品はすつと立つて、しなやかに柳みぎの幹たたを叩いたので、蜘蛛くもの巣の乱れた薄い色の浴衣たもとの袂は、ひらひらと動いた。

与吉は半被はつぴの袖を搔かき合あわせて、立つて見て居たが、急に振返つて、

「そうだ。じゃあ親方に聞いて見ておくんな。可いかいかい、」
「ああ、可いかいとも、」といつて向直つて、お品は搔か潜いくぐつて襷たすきを

脱^{はず}した。斜めに袈裟^{けさ}になつて結目^{むすびめ}がすらりと下^{さが}る。

「お邪魔申しました。」

「あれだよ。又、」と、莞爾^{にっこり}している。

「そうだっけな、うむ、此方^{こっち}あお客^{きやく}だぜ。」

与吉^{ひとり}は独で頷^{うなづ}いたが、背^{うしろ}向^{むき}になつて、肱^{ひじ}を張^ひつて、南^{なん}の字

の印が動く、半被^{はんぺい}の袖^{そで}をぐツと引いて、手を掉^ふつて、

「おかみさん、大威張^{おおいばり}だ。」

「あばよ。」

六

「あい、」といいすてに、急足^{いそぎあし}で、与吉^{うきち}は見る内に間近^{まぢか}な渋色の橋の上を、黒い半被^{はつび}で渡った。真中^{まんなか}頃で、向岸から駆けて来た郵便脚夫^{きやくふ}と行合^{ゆきあ}つて、遣違^{やりちが}いに一緒になったが、分れて橋の両端^{りょうはし}へ、脚夫はつかつかと間近に来て、与吉は彼の^か、倒れながらに半ば黄ばんだ銀杏^{いちょう}の影に小さくなった。

七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪^{あらいがみ}のお品は、手足の真黒^{まつくろ}な配達夫^{はつぷ}が、突当^{つきあた}るように目の前に踏留^{ふみと}まつて棒立^{ぼうだち}になつて喚^{わめ}いた

のに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前どもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見ながら、片手を垂れて前垂のさきを掴んで上げつつ、素足に穿いた黒緒の下駄を揃えて立つてたが、一寸翻して、裏の名を読むと、顔の色が動いて、横目に框をすかして、片頬に笑を含んで、堪らないといったような声で、

「柳ちゃん、来たよ！」というが疾いか、横ざまに駆けて入る、柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美しい。

八

与吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐそのまま材木の前に跪ひざまずいて、鋸のこぎりの柄に手を懸かけた時、配達夫は、此処ここの前を横切つて、身を斜ななめに、波に揺られて流るるような足取あしどりで、走り去つた。

与吉は見も遣やらず、傍目わきめも触ふらないで挽ひきはじめる。

巨大なるこの樟くすのきを濡ぬらさないために、板屋根を葺ふいた、小屋の高さは十丈じょうもあろう、脚の着いた台に寄せかけたのが突立つ立たつて、殆ど屋根裏に届くばかり。この根際ねぎわに膝ひざをついて、伸上のびあがつては挽き下ろし、伸上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上うえ下したにあらわ

れて、両手をかけた与吉の姿は、鋸よりも小さいかのよう。

小屋の中には単ただこればかりでなく、両りよう傍わきに堆うずたかく偉大な材木

を積んであるが、その嵩かさは与吉の丈たけより高いので、纔わずかに鋸屑おがくずの
 降ふりつも積つつた上に、小さな身体からだ一ツ入れるより他に余地はない。で

恰あたかも材木の穴の底に跪うしろいてるに過ぎないのである。

背後は突つきぬ抜けの岸で、ここにも地つちと一面な水が蒼あおく澄あんで、ひ

たひたと小波ささなみの畝うねりが絶えず間ま近ぢこう来る。往おう来らい傍いはたには又また岸に臨まん

で、果はしなく組くみ違ちがえた材木が並べてあるが、二十三十ずつ、四

ツ目形なりに、井筒形いづつがたに、規律正しく、一定した距離を置いて、何ど

処こまでも続いて居る、四ツ目の間を、井筒かなたの彼方を、見え隠れに、

ちらほら人が通るが、皆黙あるいつて歩行あるいいて居るので。

さみし 淋い、森とした中に手拍子が揃つて、コツコツコツコツと、
 かなづち 鉄槌の音のするのは、この小屋に並んだ、一棟、同一材木納
 や 屋の中で、三個の石屋が、石を鑿るのである。

いたがこい 板 囲をして、横に長い、屋根の低い、湿った暗い中で、働
 ひと いて居るので、三人の石屋も齊しく南屋に雇われて居るのだけ
 かれら れども、渠等は与吉のようなのではない、大工と一所に、南屋
 ふしん の普請に懸つて居るので、ちようと与吉の小屋と往來を隔てた真
 むこ 向うに、小さな普請小屋が、真新しい、節穴だらけな、薄板
 さんぼう で建つて居る、三方が囲ったばかり、編んで繫いだ縄も見え、
 ひあたり 一杯の日当で、いきなり土の上へ白木の卓子を一脚踏えた、
 おおどびん その上には大土瓶が一個、茶呑茶碗が七個八個。

うしろ

後に置いた腰掛台の上に、一人は匍匐はらばいになつて、肱ひじを張つて

長々と伸び、一人は横ざまに手枕てまくらして股引穿ももひきはいた脚かかを屈かがめて、

あたま

天窓あたまをくツつけ合つて大工が寝そべつて居る。普請小屋と、花みかげ

いし もんぼしら

崗石の門柱もんぼしらを並べて扉が左右に開いて居る、門の内の横手

こうし

の格子の前に、萌黄もえぎに塗つた中に南と白で抜いたポンプすわが据つて、

ふち

その縁に釣棹つりざおと畚ふことがぶらりと懸かかつて居る、真まことにももの静かな、

たいけ

大家の店前みせさきに人の氣勢けはいもない。裏庭とおもうあたり、遙か奥の

かた

方には、葉のやや枯れかかった葡萄棚ぶどうだなが、影を倒さかしまにうつして、

ここ

此処もおなじ溜池ためいけで、門のあたりから間近な橋へかけて、透間すきま

らんぐい

もなく乱杭らんぐいを打つて、数かず限かぎりもない材木を水のまみに浸ひたして

かしこ

あるが、彼処かしこへ五本、此処ここへ六本、流寄ながれよつた形が判で印おした如

く、皆三方から三ツに固かたまつて、水を三角形に区切つた、あたりは
 広く、一面に早苗田さなえだのようである。この上を、時々ばらばらと雀すずめ
 が低ひくう。

九

その他たに此処で動いてるものは与吉のこぎりが鋸に過ぎなかつた。

余り静かだから、しばらくして、又しばらくして、樟くすのきを挽ひく毎ごと
 にぼろぼろと落つる木屑きくずが判然はつきり聞える。

(父親ちやんは何故なぜ魚を食べないのだろう、)とおもいながら膝ひざをつい
 て、伸上のびあがつて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極め

て軽く、材木のひとつところ一処から湧くようになって、肩にも胸にも膝の上にも降りかかる。トタンに向うぎまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨しぐれのような微かすかひびきな響が、寂寞せきばくとした巨材の一方から聞えた。

柄えを握えつて、挽きおろして、与吉は呼吸いきをついた。

(左様そうだ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がったまま、皿の中に残るのだ、)

と思いながら、絶えず拍子にかかつて、伸のびちぢみ縮ちぢみに身体からだの調子を取つて、手を働かす、鋸が上下して、木屑がまた溢こぼれて来る。(何故だろう、これは鋸で挽く所せ為いだ、)と考えて、柳の葉が痛むといったお品ことばの言が胸に浮ぶと、又木屑が胸にかかった。

与吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた周囲は、杉の香、松の匂においに包まれた穴の底で、目を睜みはつて、ひざまず跪ひざまずいて、鋸を握つて、空そらぎまに仰いで見た。

樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏もれてちらちらする日光に映つて、言うべからざる森しんげん厳おもむきな趣がある。この見上ぐるばかりな、これほどの丈たけのある樹はこの辺あたりでついぞ見た事はない、橋の袂たもとの銀杏は固もとより、岸の柳は皆短ひくい、土手の松はいうまでもない、遙はるかに見えるその梢こずえは殆ど水面と並んで居る。

然しかも猶なほこれは真直まつすぐに真四角に切たもので、およそ恣かかる角かくの材木を得ようというには、そま杣が八人五日あまりも懸らねばならぬと聞く。

那そんなな大木のあるのは蓋けだし深しん山さんであらう、幽谷ゆうこくでなければならぬ。殊ことにこれは飛驒山ひだやまから廻まわして来たのであることを聞いて居た。

枝は蔓はびこつて、谷に亘わたり、葉は茂つて峰を蔽おおい、根はただ一山ひとやまを絡まとつて居たろう。

その時は、その下した蔭かげは矢張やっぱりこんなに暗かつたか、蒼空あおぞらに日の照る時も、と然そう思つて、根際ねぎわに居た黒い半被はつぴを被きた、可愛かわいい顔の、小さな蟻ありのようなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、

(父親ちやんは何うしてゐるだらう、)と考へついた。

鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は弥六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あの、船の傍を漕いで通りすがりに、父上に声をかけてくれる時分だ、)と思わず振向いて池の方、うしろの水を見返った。

溜池の真中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着

た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、足を突張って、長い棹を繰って、

画の如く漕いで来る、筏は恰も人を乗せて、油の上を迂るよう。

すると向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を

掠めて、蒼い水の上を鷗が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

十

「与太坊、父爺は何事もねえよ。」と、池の真中から声を懸けて、おやじは小屋の中を覗こうともせず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈んだ筏を棹さして、この時また中空から白い翼を翻して、ひらひらと落して来て、水に姿を宿したと思うと、向うへ飛んで、鵲の去った方へ、すらすらと流して行く。

これは弥六といつて、与吉の父爺が年来の友達で、孝行な児が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりにその消息を伝えるのである。与吉は安堵して又仕事にかかった。

（父親は何事もないが、何故魚を喰べないのだろう。左様だ、刺身は一寸だめしで、鱸はぶつぶつ切だ、魚の煮たのは、食べると

肉がからみついたまま頭に繫つながつて、骨が残る、彼の皿の中の死骸に何どうして箸がつけられようといつて身震みふるをする、まったくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切くいけると痛むのだ、— と思ひ、又この偉大なる樟くすのきの殆ど神聖に感じらるるばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑しんかんとして日中薄暗い中に、ほのぼの見える材木から又ぱらぱらと、ぱらぱらと、其処そこともなく、鋸のこぎりの屑くずが溢こぼれて落ちるのを、思わず耳を澄まして聞いた。中央の木目もくめから渦うずいて出るのが、池の小波のひたひたと寄する音の中に、隣の納屋の石を切る響ひびに交つて、繁った葉と葉が擦合すれあうようで、たとえば時雨しぐれの降るようで、又無数の山蟻やまありが谷の中を歩行あるく蹺音あしおとのよ

うである。

与吉はとみこうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝ひざの上、跪ひざまずいてる足の間に落溜あいだ おちたまった、堆うずたかい、木屑の積ったのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今までその上について暖あただつた膝ひざ頭がしらが冷々ひやひやとする、身体からだが濡ぬれはせぬかと疑つて、彼処あち此処袖襟こちそでえりを手で拊はたいて見た。仕事最中、こんな心持こころもちのしたことは始めてである。

与吉は、一人谷のドン底に居るようで、心細くなつたから、見透すかす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目あわせめから洩もれて、幽かすかに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯単ただたんに三二尺さんじやく角くのみのものではなかつた。

与吉は天日を蔽^{おほ}う、葉の茂つた五^{いつかかえ}抱^{かか}もあろうという幹に注^し
 連繩^{めなわ}を張つた樟^{たいじゆ}の大樹^{あたか}の根に、恰^はも山の端^{ところ}と思う処に、しツき
 りなく降りかかる翠^{みどり}の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あ
 たりは真^{まつくら}暗^{くら}な処に、虫^{ちいさ}よりも小な身体で、この大木の恰^{ちいさ}もその
 注連繩の下あたりに鋸^{つぎ}を突^つきして居るのに心着いて、恍惚^{うつとり}とし
 て目^みを睜^はつたが、氣が遠くなるようだから、鋸^{のこぎり}を抜こうとすると、
 支^{つか}えて、堅^くく食入^{くい}つて、微^{かす}かにも動かぬので、はツと思うと、谷
 々、峰々、一^{いちじんごう}陣轟^{ごう}！ と渡る風の音に吃^{びつくり}驚^{おどろ}して、数^{すうせんじん}千仞^{じん}の
 谷底へ、真^{まつさかさま}倒^{たふさ}に落ちたと思つて、小屋の中から転がり出した。

「大變だ、大變だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙^{なみだ}声^{こゑ}で、枕^{あか}も上らぬ寢床の上の露草

の、がツくりとして仰向けあおもむの淋い素顔さびしに紅べにを含んだ、白い頬に、
 蒼あおみのさした、うつくしい、妹の、ばさばさした天神てんじん鬚まげの崩れ
 たのに、浅黄あさぎの手絡てがらが解とけかかつて、透すきとお通とおるように真白まつしろで細ほそ
 い頸うなじを、膝の上に抱かかえいて、抱かかえ占しめながら、頬ほお摺すりしていった。
 お品が片手にはしっかりと前刻さつきの手紙を握にぎって居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しつ
 かりおし。お手紙にも、そこらの材木に枝葉がさかえるようなこ
 とがあったら、夫婦に成なって遣やるツて書いてあるじゃあないか。

親おやの為ためだつて、何だつて、一いっ旦たん他の人に身をお任せだもの、
 道理もつともだよ。お前、お前、それで気を落したんだけれど、命をか
 けて願ねがったものを、お前、それまでに思うものを、柳ちゃん、何

だつてお見捨てなさるものかね、解わかつたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可いいよ。大丈夫だよ。願ねがは叶かなつたよ。」

「大變だ、大變だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂つた、大變だ、枝が出来た。」

と普請ふしんごや小屋、材木納屋の前で叫び足らず、与吉は狂氣の如く大声で、この家の前やをも呼よわつて歩行あるしたのである。

「ね、ね、柳ちゃん——柳ちゃん——」

うつとりと、目を開あいて、ハヤ色の褪あせた唇くちびるに微笑ほほえんで頷うなずいた。人に血を吸われたあわれな者の、將まさに死なんとする耳に、与吉は福音ふくいんを伝えたのである、この与吉のようなものでなければ、實際じつじまた憐かる福音は伝えられなかったのであろう。

青空文庫情報

底本：「化鳥・三尺角 他六篇」岩波文庫、岩波書店

2013（平成25）年11月15日第1刷発行

2015（平成27）年5月15日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日

初出：「新小説 第四年第一巻」

1899（明治32）年1月1日

※表題は底本では、「三尺角《さんじゃくかく》」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三尺角

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>